



南葵音楽文庫
和歌山県立図書館内
和歌山市西高松 1-7-38
tel.073-436-9500
<https://www.lib.wakayama-c.ed.jp/nanki/>

南葵音楽文庫の「通奏低音」関連資料、参考文献

George Frideric Handel?, Some Golden Rules for the attaining to play through bass. Autograph Ms? L-11
Georg Philipp Telemann, Singe-, Spiel- und Generalbass-Ubungen, Hamburg 1733/34 N-6/92 「762/NE4/南葵」
The New Oxford History of Music, vol.IV "Humanism 1540-1630", 1968
The New Oxford History of Music, vol.V "Opera and Church Music 1630-1750", 1975 762/NE5/南葵
Manfred Bukofzer, Music in the Baroque Era, New York 1947 762.05/BU/南葵
Source Readings in Music History, O. Strunk, ed. 1950 ナ/762/ST/
フリードリヒ・ブルーメ『ルネサンスとバロックの音楽』 ナ/762.0/ブコ
クロード・パリスカ『バロックの音楽』1975 ナ/762.05/パリ
皆川達夫『バロック音楽』講談社現代新書 291, 1972 ナ/762.05/ミナ
皆川達夫『合唱音楽の歴史』1965 767.4 ミナ

「通奏低音」Basso continuo とは？

16世紀末から18世紀中頃に使われた伴奏の形態。また、その伴奏の基礎となる低音部の旋律や声部のこと。楽譜には、低音部の旋律のみが記譜され、通奏低音を担当する演奏者は、それに基づいて和音を即興的に補いながら伴奏を完成させた。なお、通奏低音の低音部には、奏すべき和音を示す数字が付加される場合もあり、それは数字付き通奏低音と呼ばれる。

「通奏低音」の演奏

通奏低音の演奏には、チェンバロやオルガン、テオルボ（大型のリュート）などの和音を演奏するのに適した楽器が用いられ、さらに低音部の旋律をチェロ、バス・ヴィオラ・ダ・ガンバ、ファゴットなどの低音域の旋律楽器で重複することがしばしば行われた。なお、通常、通奏低音には楽器の指定はなく、演奏者の判断にゆだねられた。

「通奏低音」の音楽史における意味

16世紀末から18世紀中頃だけに使われた伴奏の形態であることから、この期間を前後の時代と区分して「通奏低音の時代」と呼ぶことがある。なお、この「通奏低音の時代」は、音楽史における「バロック時代」と一致する。

通奏低音の実例 H.パーセル《音楽はほんの一時でも》『オルフェウス・ブリタニクス』N-3/15 から

